－所蔵作品紹介－

岡沼　淳一　OKANUMA Junichi

六月の翳

ろくがつのかげ

作品データはこちら

2019年６月、岡沼淳一の訃報が届いた。享年75歳。8月31日には当館で本作についてのギャラリー・トークが予定され、つい１週間前には筆者とその相談をしていたばかりだった。

自宅で妻を介護する生活を送っていた岡沼は、長い間、年に一度の全道展でのみ作品を発表していた。2017年に妻を看取り、その空白を埋めるかのように精力的な活動を再開し、2018年には「岡沼淳一　木彫の世界」（北海道立帯広美術館　９月15日～12月2日）と「岡沼淳一工房展」（自宅アトリエ９月15日～12月2日）を開催。亡くなる直前にも札幌の全道展会場で元気な姿を見せていたという。突然の旅立ちだった。

本作は、平成30年度の新収蔵品。主要部分はニレ、下に敷き詰めた部分はナラ。どちらも埋もれ木である。木洩れ日が川の水面を通して底にきらめくイメージだという。それは最初から作家が意図したものではなく、制作するうちにぼんやりと見えてくるのだという。

函館生まれの岡沼は、北海道学芸大学函館分校（現・北海道教育大学函館校）卒業後、教員として十勝に赴任、生涯を十勝で過ごした。はじめて埋もれ木と出会ったのは1974年。知人が札内川から出たニレの埋もれ木を使ってみないかと声をかけたのがきっかけだった。当時の岡沼は、十勝の彫刻家・富谷道信のカツラ材を磨いた肌色や木目に惹かれていた。そのため「木の聲を聞き、木の考えたことを考え」制作する岡沼は、すぐにはニレの埋もれ木の声に「耳を傾けることが出来なかった」という。そのとき岡沼の心を動かしたのは「札内川」だった。岡沼が高校３年生の夏、日高山脈で登山しようと札内川で野営した際、豪雨にあい、沢の水が流れ込むテントの中で岩や流木がぶつかりあう音が鳴り響くのを聞いた。その様子に自然の原始の力を感じ、強く心に残ったという。「札内川から出てきた埋もれ木」に対して、青春時代、心身に深く染みこんだ情景を重ね、それが制作の動機となった。

1975年．岡沼は、全道展にニレの埋もれ木を用いた作品を出品する。当初は、製材されたニレの埋もれ木の青灰色ではっきりとした木目に違和感を感じ、浸透性のオイルで着色していた。10年ほど経た後、埋もれ木そのものの色合いにも惹かれるようになり、ニレの埋もれ木の美しい木目を生かした作品を制作するようになる。それはやがて岡沼の代名詞となっていった。

＊「　」内は「楡の埋もれ木と私」第74回全道展図録より